様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３５４１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０７２１

研究課題名（和文）日韓の高学年児童における英語学習動機に影響を及ぼす要因

研究課題名（英文）Factors that Influence the English Learning Motivation of Fifth and Sixth Grade Students in Japan and South Korea

研究代表者
林原　慎（HAYASHIBARA, Shin）

福山平成大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：１０６１５６０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本と韓国の初等教育において、英語学習動機の差異を明らかにすることであった。日本の小学５・６年生812名、韓国の小学５・６年生809名を対象に調査した結果、日韓の小学生の英語学習動機はどちらも同じ4因子構造をしており、それらのうち、「有用性」、「交流欲求」、「不安回避」の3因子で韓国の方が日本よりも高いことなどが分かった。

研究成果の概要（英文）：This research illuminates differences in English Learning Motivation among students in Japan and South Korea. A study of 812 fifth and sixth students in Japan and 809 fifth and sixth students in South Korea showed that English Learning Motivation is composed of four factors, Korean students were at significantly higher level than Japanese students in usefulness, exchange desire and avoiding uneasiness.

研究分野：国際教育

キーワード：英語学習動機　韓国

１．研究開始当初の背景

日本の小学校では 2011 年度より外国語活動が全面的に実施されている。学習指導要領には、小学校外国語活動は５、６年生で年間 35 時間（週１時間程度）、原則として英語で行うことが記載されている（文部科学省、2008）。また、韓国では、1997 年度より初等学校３年生以上で英語教育を必修教科として実施している。2012 年度からは初等学校３、４年生で週２時間、５、６年生で週３時間実施されている（高橋・柳、2012）。このように近年両国では、初等教育の高学年における英語教育を重要視する動きが共通して見られる。また、英語に関する日本と韓国の社会的環境の共通点としては、自国内の一般的な生活の中で英会話を行う頻度が比較的少ない、他言語話者との直接的な接触機会が比較的少ないことなども挙げられる。初等教育段階での英語学習は、動機づけが非常に重要となる。日本の中教審の「初等中等教育文化会（第 55 回）・教育課程部会（第 66 回）合同会議議事録」には外国語活動新設の目的は「広い意味での外国語学習の導入であって、何のために外国語を学ぶのかという動機づけ、母語とは違う言葉でコミュニケーションをする重要性、母語に対する認識を深める」ことであるとしている（文部科学省、2007）。

また、韓国の初等教育においても児童の英語学習動機を高めることは重要な目標の一つである。第７次改訂教育課程には「初等学校の英語は英語に対する興味と関心を持って、日常生活で使う基礎的な英語を理解して表現する能力を育てるのを目標にする」と記載されており、さらに具体的な目標には「英語に対し興味と関心を持つ」という項目がある（カレイラ、2011）。このように両国の初等教育における英語学習では、児童の英語学習の動機づけを重要視しているが、日韓高学年児童の英語学習動機の構造にはどのような共通点や相違点が存在するのであろうか。児童の英語学習動機に影響を及ぼすのは、授業内容、学習環境、教師など学校に関する要因だけでなく、家族や友人の国際性など間接的な異文化接触による要因や、異文化受容に関連した個人の性格や趣向なども要因となっていると考えられる。本研究は、このような英語学習動機に及ぼす要因のプロセスにも日韓の児童の間に共通点や相違点を明らかにすることで、児童の英語学習意欲を高める手立てを検討する上での一助としたいという背景があった。

２．研究の目的

本研究の主な目的は、日本と韓国の初等教育の高学年児童において、１）英語学習動機の差異を分散分析により明らかにする、２）国別、海外経験別の英語学習動機に影響を及ぼす要因のプロセスの差異を多母同時分析により明らかにすることであった。また、集計したデータを基に、日韓の小学生が感じる教科書の印象と海外経験の関係及び外国のイメージの差異を補足的に明らかにした。

３．研究の方法

日本での調査の協力者は、５・６年生合計 812 名であった。対象とした７校はすべて異なる都道府県の公立小学校であり、内訳は秋田県秋田市 85 名、東京都杉並区 111 名、愛知県豊田市 307 名、徳島県石井町 82 名、広島県広島市 173 名、大分県佐伯市 37 名、鹿児島県日置市 17 名であった。調査対象校はできるだけ多様な地域と学校規模になるように選定した。全体の性別構成は、女子 406 名（50.0%）、男子 403 名（49.6%）、不明３名（0.4%）であった。

一方、韓国での調査の協力者は、韓国の５・６年生合計 809 名であった。韓国はソウルと地方の教育格差が激しいことなどを考慮し、今回はソウルの学校２校、その他の地方にある学校２校を調査した。対象とした４校はすべて公立小学校であり、内訳についてはソウル特別市２校がそれぞれ 149 名と 231 名、京畿道坡州（パジュ）市 224 名、慶尚南道金海（キメ）市 205 名であった。全体の性別構成は、女子 441 名（50.8%）、男子 394 名（48.7%）、不明４名（0.5%）であった。

調査は日韓とも 2012 年６月から７月中旬までの間に、学級担任を通して実施された。質問紙の翻訳については、まず日本語で質問紙を作成し、日本語が意味するものと韓国語が同じとなるように細心の注意を払って翻訳を行った。翻訳は、まず、韓国人研究者Ａ（大学院博士課程後期２年／日本語検定１級）に日本語から韓国語に翻訳してもらった。次に、他の韓国人研究者Ｂ（大学院博士課程後期２年／日本語検定１級）に、バックトランスレーションを行ってもらい、さらに、原文との差異を両者で協議してもらいながら検討、修正した。分析にあたっては、統計ソフト IBM SPSS Statistics Desktop Version 20.0 及び IBM SPSS Amos Version 20.0 を使用した。

４．研究成果

表１は、英語学習動機についての 20 項目を因子分析（最尤法、プロマックス回転）した結果である。「有用性」、「内発的」、「交流欲求」、「不安回避」の４因子が見出された。表２は、因子分析で得られた４因子の因子得点の平均値について日韓の差を分散分析した結果である。「有用性」、「交流欲求」、「不安回避」の３因子で、韓国の方が日本よりも有意（$p<0.001$）に高い結果と同じ結果となった。

表１　英語学習動機の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転）

項目番号　　項目内容	因子 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
第Ⅰ因子　有用性（α＝.822）				
M12．勉強しておくべき大切な内容だと思ったから	.792	.015	.016	.007
M8．勉強しないと後で困ると思ったから	.778	-.129	-.063	.020
M16．将来，役に立ちそうだと思ったから	.750	-.011	.045	.028
M4．必要なことだと思ったから	.725	.148	-.104	-.056
M7．自分のなりたい仕事につくのに必要だと思ったから	.648	-.143	.209	.027
M3．入学試験で必要になると思ったから	.640	.030	-.082	.018
M11.英語が分かると，より広い世界がわかるようになるから	.418	.204	.282	-.004
第Ⅱ因子　内発的（α＝.825）				
M2．授業が楽しかったから	-.001	.862	-.099	-.069
M6．教科書がおもしろかったから	-.142	.828	-.055	.120
M15．英語を勉強するのがおもしろかったから	-.034	.783	.133	.000
M5．難しいことをやってみることが楽しかったから	.034	.620	.158	-.042
M10．英語ができるようになるのがうれしかったから	.211	.581	.053	-.019
第Ⅲ因子　交流欲求（α＝.840）				
M14．外国の人と仲良くなりたかったから	-.061	-.053	.915	.002
M13．いろいろな国の人と話をしたいと思ったから	.018	.034	.865	-.020
M1．将来，外国の友だちがほしいと思うから	-.071	.159	.698	-.017
M20．外国旅行に行ってみたいと思ったから	.186	-.061	.525	.074
第Ⅳ因子　不安回避（α＝.701）				
M17．できないとみんなにバカにされると思ったから	.025	-.015	.044	.812
M19．英語を勉強しないと自分がはずかしいと思ったから	.007	.096	-.049	.811
M18．英語を勉強しないと親がうるさいから	-.100	-.109	.045	.725
M9．自分だけ勉強しないのは不安だから	.216	.125	-.062	.420

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	－	.635	.691	.293
Ⅱ		－	.672	.196
Ⅲ			－	.241
Ⅳ				－

項目番号は実施順序であり、アルファベットは除外してあった。

表２　国別による各因子得点の分散分析結果

国名	有用性（*SD*）	内発的（*SD*）	交流欲求（*SD*）	不安回避（*SD*）
日本(812)	-0.10(1.01)	0.01(0.96)	-0.23(0.84)	-0.18(1.01)
韓国(809)	0.10(0.88)	-0.01(0.94)	0.22(0.94)	0.18(0.85)
*F*値	$F(1,1542)=18.61$***	$F(1,1542)=0.23$ *ns*	$F(1,1542)=98.52$***	$F(1,1542)=58.62$***

***$p<.001$　*ns*有意差なし

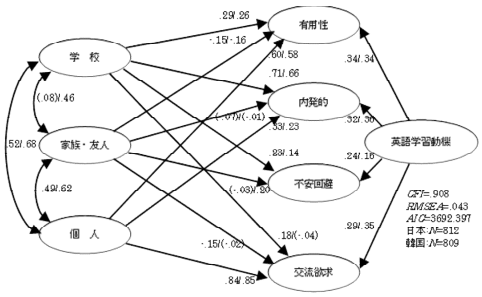

図１　国別による英語学習動機が影響を及ぼす要因を示すパス図（数値は標準化解）

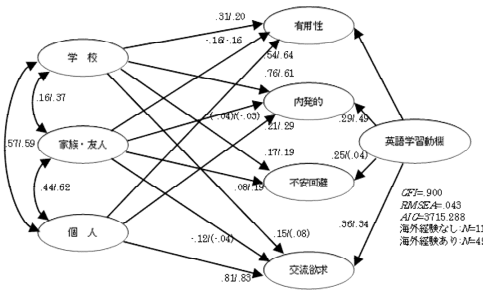

図２　海外経験別による英語学習動機が影響を及ぼす要因を示すパス図（数値は標準化解）

また、英語学習動機に影響を及ぼす要因を共分散構造分析により分析した。CFI,RMSEA,AIC の適合度指標の数値から、３要因のモデルが妥当であると判断し、国別（図１）及び海外経験別（図２）による多母集団同時分析を行った。国別の分析では、不変配置が成り立つことが確認されたため、日本と韓国の２群間でのパス係数の差の検定を行った。検定の結果、「学校」から「交流欲求」へのパスは日本の方が韓国よりも有意（$p<0.05$）に高く、逆に「家族・友人」から「不安回避」へのパスは韓国の方が有意（$p<0.001$）に高かった。海外経験別の分析においても、配置不変が成り立つことが確認されたため、海外経験有無別の２群間でのパス係数の差の検定を行った。検定の結果、「学校」から「有用性」へのパスで海外経験がない群の方が、海外経験がある群よりも有意（$p<0.01$）に高かった。その他のパス係数の差には有意差がなかった。

初等教育段階の英語学習動機は相対的に韓国の方が高いが、学校要因や家庭・友人要因によってその影響の差異があることが確認された。今後、日韓両国では、さらに異文化間の移動が活発になることが予想されるが、海外経験がない児童にとっては学校での英語教育が学習動機を高めるためにより重要な役割を担うようになることが示唆された。

また、日本と韓国の小学校で使用されている英語教材の外国の登場回数及び児童の海外経験についての比較を行った結果、比較した日本の教材と韓国の教材では、韓国の方で登場国数が多く、外国登場回数も多い傾向がみられた。次に、日本と韓国の児童において海外経験が英語教材の印象へ及ぼしている影響の差異を多母集団同時分析により明らかにした（図３、図４）。「訪問外国数」や「海外日数」からのパスには有意な差がなく、「異文化興味」から「教科書理解」へのパスで韓国が日本よりも有意に高かったのは、韓国の教科書においては異文化に興味をもたせていることが教科書の理解につながっていると解釈できる。実際に教科書の記述内容からは、乗り物や食文化などの「異文化を英語で学ぶ」という傾向がみられる。一方、日本の英語教材の外国登場回数や内容は異文化に興味を持たせる内容が乏しい。このことはそもそも日本の英語教材における学習内容の分量が少ないことが起因しているとも考えられる。また、異文化の登場回数が少ないだけではなく、異文化を英語で学ぶ内容になっていないことも大きく影響していると考えられる。いずれにせよ、今後、日本の英語教材においては、児童に異文化への興味をもたせ、理解を促すような工夫が求められる。反対に日本の方で韓国よりも有意に高かったのは、教科書好感から教科書理解である。教科書の好感度が直接教科書理解につながっ

ているのは、日本の『英語ノート』や『Hi, friends !』の学習内容が韓国の教科書に比べ容易であるためではないかと考える。また、日韓ともに児童の海外経験のうち、「海外日数」から「教科書理解」へのパス係数が有意（p <.05）になっていたことから、児童の長期海外経験は教科書の理解を促すことが明らかになった。

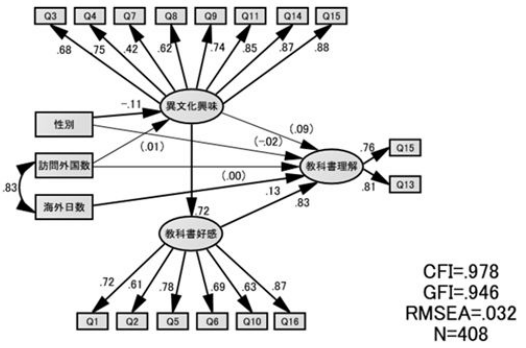

図３　日本の児童における海外経験が教科書の印象へ及ぼす影響のパス図（標準化係数）

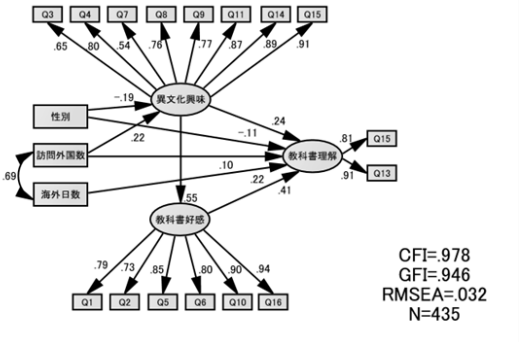

図４　韓国の児童における海外経験が教科書の印象へ及ぼす影響のパス図（標準化係数）

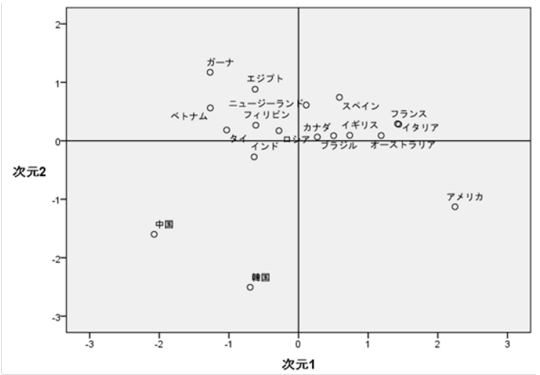

図５　多次元尺度法による日本の児童の各国好感度

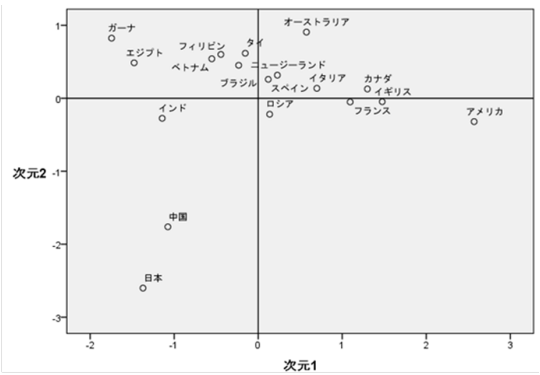

図６　多次元尺度法による韓国の児童の各国好感度

さらに、日本と韓国の初等教育の高学年児童における英語教材に登場する外国の国々の好感度について多次元的な認知構造を明らかにした上で（図５、図６）、日韓の児童の外国好感度の差異を明らかにした。結果、日本と韓国の児童は類似した認知構造であるという結果となり、「欧米か否か」という次元と「政治的に対立する報道が多いか否か」という次元が抽出された。また、日本の児童にとっては韓国と中国が、韓国の児童にとっては日本と中国が、それぞれ飛び抜けて他国より遠くに位置していた。各国好感度の平均値についての比較では、18 か国中、半数の９カ国で韓国が日本に対して有意に高い結果となった。海外経験別の分析では、実際に訪問することでその国の好感度は高くなる傾向が認められた。

今後の課題として、日本と韓国以外の国での児童がどのような英語学習動機や外国に対する好感度を持っているのか等の調査を行うことで、複眼的な解釈を加えていく必要があると思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７　件）

①林原慎「韓国の児童における海外経験が英語教科書の印象に及ぼす影響」，日本教材学会，教材学研究，第 24 巻，pp.7-14.,2013 年 3 月

②林原慎「日本の高学年児童における英語学習動機に影響を及ぼす要因」，日本教育工学会，日本教育工学会論文誌，第 37 巻 2 号，pp.117-127.,2013 年 8 月

③林原慎「韓国の高学年児童における英語学習動機に影響を及ぼす要因」，日本国際教育学会，国際教育，第 19 号，pp.1-15.,2013 年 9 月

④林原慎「児童の海外経験が英語教材の印象に及ぼす影響－多母集団同時分析を用いた日韓比較－」日本教材学会，教材学研究，第 25 巻，pp.7-，14.，2014 年 3 月

⑤林原慎，沈正輔「日韓の高学年児童における外国好感度の比較」福祉健康学研究，福山平成大学福祉健康学部，第９巻，pp1-8.,2014 年 3 月

⑥ Shin HAYASHIBARA, “Factors that Influence the English Learning Motivation of Fifth and Sixth Grade Students in Japan”, Educational Technology Research,

Vol.37,pp.25-35. Dec. 2014.
⑦Shin HAYASHIBARA, “Comparison of the English Learning Motivation of Fifth and Sixth Grade Students in Japan and South Korea”, The 15th International Conference on Education Research (ICER, 2014), Oct.2014.

〔学会発表〕（計　3　件）

①林原慎「韓国の児童における海外経験が英語教科書の印象に及ぼす影響」，日本教材学会，2012 年 10 月
②林原慎「児童の海外経験が英語教科書の印象に及ぼす影響 - 多母集団同時分析による日韓比較 -」，日本教材学会，2013 年 10 月
③Shin HAYASHIBARA, “Comparison of the English Learning Motivation of Fifth and Sixth Grade Students in Japan and South Korea”,The 15th International Conference on Education Research, Seoul Univ., Republic of Korea (ICER, 2014), Oct.2014.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
林原 慎（Shin HAYASHIBARA）
福山平成大学福祉健康学部こども学科・教授

研究者番号：10615602

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：